

生命と暮らしを守る：住友赤平・空知・夕張炭鉱 の炭鉱主婦会の聞き書きから

著者	西城戸 誠, 大國 充彦
出版者	法政大学人間環境学会
雑誌名	人間環境論集
巻	18
号	1
ページ	66 (29) - 27 (68)
発行年	2017-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/13575

生命と暮らしを守る

——住友赤平・空知・夕張炭鉱の炭鉱主婦会の聞き書きから——

西城戸誠（法政大学人間環境学部）・大國充彦（札幌学院大学）

1 はじめに——問題関心と問題の所在

かつて北海道には多くの炭鉱があり、それぞれの炭鉱で働く夫や息子の「生命と暮らし」を守るさまざまな活動を行った女性たち——炭鉱で働く夫の妻や、息子の母——がいた。彼女らは、それぞれの炭鉱で、男性中心の労働組合に対して、主婦会（炭鉱主婦会）を結成し、さらにその上部組織としての日本炭鉱主婦協議会（炭婦協）という場で、炭鉱社会における生活にかかるさまざまな活動を担ってきた。

主婦会の活動はそれぞれの炭鉱ごとに違いはあるものの、戦後直後においては、産児調整、生活刷新運動、福利厚生を求める運動、物価値上げ反対闘争などを行ってきた。また、炭鉱の企業側に対して保安、労災補償を求める運動をしつつ、地域社会の中では生活協同組

合や消費者協会の設立に関わった。さらには、日々の暮らしの問題を学習し、調査し、行政や企業と話し合い、生活や地域、社会のあり方を変えていく活動を担う「生活学校」の設立にも携わったりする炭鉱主婦会もあった。このように産炭地において組織動員力が相対的に高い炭鉱主婦会は、各地域の女性（婦人）連絡協議会や、労働組合の主婦会・家族会の集まりである主婦連絡協議会でも影響力を発揮し、多様な活動の担い手となった。そして、一九六〇年代以降の閉山阻止闘争にも、各炭鉱の主婦会や炭婦協は中心的な担い手のひとつだった。

1 三井芦別炭鉱主婦会がある北海道芦別市では数多くの生活学校が開かれた。芦別市では他の産炭地で設立された消費者協会が、生活学校の活動が活発であったことから、設立されなかったほどである。なお、芦別市における女性運動や生活学校の展開に関する聞き書き、論考については、別稿を準備している。

つまり、炭鉱主婦会の活動は、戦後北海道の女性運動の歴史の中で、動員力の大きさや組織的な活動の展開という点において大きな存在であったと考えることができる。

もともと、炭鉱主婦会、炭婦協の活動に対する批判的な視点もある。それは、炭鉱主婦会や炭婦協が、男性中心の各炭鉱の労働組合、日本炭鉱労働組合（炭労）の「対」となる組織としての位置づけであることから、炭鉱主婦会や炭婦協が労働組合や炭労の「補完物」と見なされることや、性別役割分業からの解放や女性の社会進出・経済的な自立を主張する立場からは、「主婦」カテゴリーによる運動は批判の対象となったからである²。

もともと「この時期の女性たちの運動を、女と男の関係性の変革こそが第一義的に重要なものだという、単一の尺度によって切り捨てることはできない。男の争議の後方支援であったとしても、その過程で、彼女ら

2 例えば、河野（一九八五）では、炭婦協が「男たちの組織」に従属していることへの批判が指摘される。さらに、九州の炭鉱を事例として、炭鉱主婦会が女性解放の観点から「後退」しているという指摘（島村一九八五）や、結果として家族イデオロギーを強化することにつながる主婦会の存在を指摘した野依（二〇一〇）の議論がある。

は独自の活動の幅を広げていった」という評価（天野、二〇〇五、二五―三六頁）があるように、日常生活上の問題からスタートし、その後、地域社会や、社会全体の課題の解決主体として機能したことへの高い評価も見られる。

本稿ではこれらの評価の是非に関する議論はこれ以上展開しないが、北海道空知管内における三つの炭鉱主婦会に所属した女性の聞き書きを紹介し、炭鉱主婦会の活動とその展開に関する論点を提示することにしたい。

2 聞き書きという手法とこれまでの調査の経緯

さて、聞き書きとは、語り手の言葉を丹念に聞き取り、それを一つの文章にまとめ上げる手法である。語り手の人柄や、さまざまな思いを、語り手自らが発した言葉を紡いで表現する手法によって、調査票調査で表される数字や、表層的な語りからは読み取ることができない、語り手の内面を理解することを目的としている。つまり、

3 夫が毎日の職場での出来事を妻に向けて話すそれぞれの家での夫婦「会議」、月一回の家族会議、共同保育所づくり、日常品の掛け売りの交渉や値下げ運動など。

聞き書きとして記録された内容は、語り手の言葉であるが、語り手が聞き手との相互作用の中で表出した言葉であり、語り手と聞き手が共同して作り上げた共同認識の現れである（西城戸、二〇一六）。

本稿で聞き書きという手法を採用した理由は、北海道の炭鉱主婦会や炭婦協に関する記録、研究状況と関連している。炭鉱主婦会や炭婦協の記録は、当事者の手記や記念誌が中心であるが、主婦会の解散記念誌はどの炭

4 当事者以外の記録の炭鉱主婦会、炭婦協の調査研究もそれほど多くはない。炭鉱主婦会、炭婦協の設立時から一九五六年九月までの合理化反対闘争までの詳細な記録は、嶋津（一九六四）によって行われている。また、戦後の「主婦」の生活の明暗を記録した永岡（一九五七）の中でも炭婦協の活動が紹介されているほか、注2で紹介した、炭鉱主婦会、炭婦協に対するジェンダー論からの批判がある。なお、北海道の炭鉱主婦会、炭婦協に関する研究には、市原（一九九七）による炭鉱主婦会、炭婦協関係者のルポルタージュがある。また、古村が、北海道の炭婦協関係者や空知の炭鉱主婦会の関係者への調査から著した、いくつかの論考がある（二〇〇五a、二〇〇五bなど）。だが、この古村の議論は、さまざまな女性団体の実態把握についての事実誤認や、「古いジェンダー意識を克服しなければならぬ」という強い前提に基づく事例解釈などが散見され、正確な実態を表していない（西城戸、二〇一七）。全般的に炭鉱主婦会や炭婦協の活動が相対的に弱体化した中で、炭鉱主婦会や炭婦協がどのような活動を展開していったのかなど、十分に議論されていないため、これらの点についても別稿で議論したいと考えている。

鉱も存在するものの、継続的に活動記録を残した炭鉱主婦会は数多くない⁵。また、これらの媒体では多くの炭鉱主婦会の会員の手記が掲載されているものの、場合によっては「よそ向き」の記述になりがちで、かつ分量も限られている。もちろん、炭鉱主婦会によっては「座談会」と称して、その当時までの主婦会に関わるテーマが議論されていることもあり、主婦会会員の「本音」を垣間見ることはできる。

しかしながら、聞き書きという手法は、語り手が限定されるものの、当事者のさまざまな思いを引き出すことができる。特に炭鉱に関する語りは、炭鉱事故や閉山に

5 北海道における炭鉱主婦会の中で例外的な事例が、太平洋炭鉱主婦会が編纂した『母のうぶごえ』である。『母のうぶごえ』は、一九五五年（昭和三十〇年）五月一日のメーデー行事の一つとして、日常生活の綴り方、うた（詩や短歌など）が募集され、それを編集した論集としてスタートした。普段、鉛筆を握らないお母さんたちが、子どもの成長や日々の仕事など、日常の喜び悲しみを綴った作品は、男女同権と言われながら発言の範囲が狭かった女性の声であり、古い妻の座、母の座への抵抗として捉えられ、母のうぶごえが母の声となることを企図されていた（『母のうぶごえ』第一号、「母のうぶごえ」発刊に当たっての挨拶「編集後記」より）。一方、芦別炭鉱主婦会では、解散記念誌の他、二〇周年、三〇周年記念誌が刊行されているほか、炭鉱主婦会以外の記念誌が芦別市には数多く残されている。

伴う「負の記憶」が当事者にも重くのしかかったためか、これまで北海道の炭鉱主婦会に関する語りの記録は多くは残されてこなかった。

筆者らは、産炭地研究会 (<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/>) の中で、炭鉱主婦会の調査を担当し、二〇一〇年から炭鉱主婦会、炭婦協の関係者の聞き取り調査と、関係資料のサルベージを行ってきた。インフォーマントのリストもない全くの白紙状態から始めて、北海道赤平市の住友赤平炭鉱主婦会の関係者の聞き取りからスタートした。そして日本炭鉱主婦協議会北海道支部（道炭婦協）の元幹部のリストを入手でき、その結果、住友赤平炭鉱主婦会を皮切りに、空知炭鉱主婦会（歌志内）、三井芦別炭鉱主婦会（芦別）、北炭幌内炭鉱主婦会（三笠）、太平洋炭鉱主婦会（釧路）の関係者や、炭鉱を離れ都市部に移住した人々に対して結成された炭鉱離職

者主婦の会などの主婦会OB組織⁷の関係者に調査を行うことができた。

調査の途中で鬼籍に入られてしまう方がいたこともあり、「聞き取り調査を十年早く行うべきだった」と考えることもしばしばであった。よって、産炭地研究会（JAFCOF）では、二〇一三年一月三〇日に「空知の炭鉱の女性たちが語る集い」を開催し、炭鉱主婦会の方々の声を残す試みを急ぐことになった。だが、聞き取り調査の中で得たことは、さらに一〇年前から聞き取り調査をしたとしても、本稿で収録したような聞き書きはできなかったのではないかという感触である。筆者らが中心的に調査をした炭鉱主婦会の関係者は、平成に入ってから閉山した炭鉱であり、調査を開始した時期は、

6 太平洋炭鉱主婦会会長で最後の炭婦協会会長でもあった佐藤邦子氏の手記（佐藤一九九九）や、釧路市立図書館による「ヤマの話を書く会」

の記録（釧路市立博物館、二〇一二）は貴重なデータである。また、筆者らが実施した炭鉱主婦会に関するシンポジウムの記録（産炭地研究会（JAFCOF）編、二〇一四）は、複数の炭鉱主婦会会長経験者による講演録である。なお、炭鉱主婦会や炭婦協に関する記述はないが、炭鉱

社会を支えた女性の聞き書きとして、田巻編（二〇一三）などがある。

7 女性の団体であるから、OG組織というべきであろうが、三井芦別や住友赤平の主婦会では、閉山後、自らを「OB会」と称していたことから、本稿ではOB組織と表記する。

8 シンポジウムの記録は産炭地研究会（JAFCOF）編（二〇一四）としてまとめられている。

9 北炭幌内炭鉱・一九八九（平成元）年閉山、三井芦別炭鉱・一九九二（平成四）年閉山、住友赤平炭鉱・一九九四（平成六）年閉山、空知炭鉱・一九九五（平成七）年閉山、太平洋炭鉱・二〇〇二（平成一四）年閉山。

炭鉱が閉山して二〇年前後を経た時期に当たる。つまり、調査時期がもう一〇年早ければ、主婦会当事者にとっては閉山後の「生々しい」記憶を相対化できずに、十分な聞き書きができなかった可能性があるからである。

もっとも、筆者らは炭婦協関連の幹部に対する調査を十分に実施することができなかった。調査対象者が高齢で、すでにインタビュー調査への応対が困難であったためである。その分、筆者らは炭鉱主婦会の様子の録音テープや、札幌女性史研究会から提供を受けた講演録の録音テープの内容から、直接調査ができなかった炭婦協関係者の発言を把握することができた（西城戸・大國・久保・井上、二〇一五）。

以上のように、炭鉱主婦会・炭婦協調査の課題は、北海道の炭鉱主婦会・炭婦協に関する聞き取り調査のデータや、二次データ、史資料を用いて、北海道の女性運動の歴史の中に炭鉱主婦会・炭婦協を位置づけること、産炭地の女性運動や地域社会にどのような影響を与えてきたのかなどの問いに答えていくこと（西城戸・大國、二〇一二）であるが、本稿はそのための基礎データと論点提示を行うことにしたい。

3 聞き書きの概要

本稿には三人の聞き書きが収録されている。一人目は、住友赤平炭鉱主婦会会長を長く務め、北海道炭鉱主婦協議会の事務局長でもあった、米森康子氏の聞き書きである。筆者らによる炭鉱主婦会調査の中では、もっとも数多く話を伺った方であり、聞き書きの内容もより深いものになっている。

米森氏の聞き書きからは、まず、幼少の頃の辛かった経験、特に「学校に行きたかった」という思いが語られる。この世代の女性で、特に地方部に居住していた者の進学率は相対的に低かった。炭鉱主婦会や地域の女性（婦人）団体の活動において、さまざまなテーマの学習会が行われたが、学びを希求する女性たちにとって、これらの学習会は学校教育の代替としての存在であったといってもよいかもしれない。¹⁰

次に、炭鉱主婦会や炭婦協の活動の具体的な内容や、労働組合との関係について言及している。主婦会には会社への交渉権はないものの、「生命と暮らしを守る」た

¹⁰ 注1で述べた、生活学校運動が盛んになった背景も、同様であると思われる。

めに会社に対して働きかけ、例えば坑内見学を実現させたことが語られている。

ただし、主婦会活動の難しさも指摘されている。一つは働く女性が増えることによって、主婦会の活動が十分に展開できなくなってきたこと、もう一つは米森氏よりも上の世代の主婦会、炭婦協のメンバーとの温度差である。炭鉱主婦会や炭婦協が社会的に力を持ち、活動のさまざまな成果があがった時代と、閉山阻止闘争の中で、他の炭鉱が次々と閉山する中で条件闘争をせざるを得ない時代では、活動の意味づけが違うことがうかがえる。

さらに、米森氏が炭鉱主婦会の活動により積極的になった背景として、嫁ぎ先の政治的スタンスの問題も指摘されている。炭鉱社会にもさまざまな政治思想をもった人がいたが、日本社会党の影響力が強く、「自分は共産党ではない」という米森氏の思いは、逆に当時の炭鉱社会における社会党と共産党の軋轢が強かったことが示唆されるだろう。

また、個々の政治思想の違いという点は、地域の女性団体の活動内容にも反映されている。聞き書きの中で、自由民主党系の女性団体と、炭鉱主婦会とは政治信条が異なっているため、選挙の時には相容れないが、選挙が

終われば、赤平という地域の問題については同じテーブルで議論を交わす場が設定されていたことが指摘されている。このような柔軟な対応は男性中心の労働組合やその関連団体には見られないことであり、女性の団体ならではの特徴であるかもしれない。

最後に、閉山後の炭鉱主婦会の活動や米森氏自身の活動についても語られている。米森氏は、住友赤平炭鉱主婦会OB会会長として、閉山後も閉山前同様の活動を、主婦会のネットワークを用いて行っていることがわかる。一般に、炭鉱主婦会のメンバーは、夫や息子が退職すると主婦会からも脱会し、退職後、当該地域にとどまらない場合は、その炭鉱主婦会との関係が途切れがちになる。後述する空知炭鉱主婦会の根田氏は、夫の定年によって、空知炭鉱がある歌志内を離れることになった。本文の聞き書きでは触れられていないが、移転先の地域でも町内会などさまざまな活動に従事する根田氏が歌志内から離れたことによって、歌志内における炭鉱主婦会を中心とした活動が、その後、停滞気味になった。それと比較した時に、閉山後の赤平市の市民活動は、炭鉱主婦会のネットワークが、ほぼそのまま残ったことによって、活動内容を少しずつ変えながらも維持されていたと言える

だろう。ただし、炭鉱主婦会メンバーの高齢化によって活動の規模は縮小気味となっている。これは旧産炭地域全般に見られることであり、一つの時代を作った女性運動、女性団体のネットワークを地域社会の中で引き継ぐことの難しさも示しているといえる。

二人目は、空知炭鉱主婦会会長、および炭鉱主婦協議会北海道支部会長を務めた、根田久枝氏である。

根田氏の聞き書きから見いだせる点は、炭鉱とは関係ない生家で生まれたものの、徐々に炭鉱の社会になれていく姿である。兄が炭鉱で働くことになってから炭住で生活するようになり、空知炭鉱の生活協同組合で働き出したことで、炭鉱の青年部のイベントでご主人と知り合い、結婚することになったものの、母親からは炭鉱の仕事が危険であるという理由で結婚に反対されたり、炭鉱生活の人づきあいの大変さなどが指摘されたりするなど、炭鉱の生活に慣れていない人びとに、炭鉱生活の過酷さというイメージが広がっていたことがうかがえる。逆に確かに炭鉱で働くことの危険性は否定できないが、炭鉱で生活し、現在は旧産炭地に住む女性への聞き取り調査によって、筆者らが数多く聞いたことは、光熱費も会社持ちであったり、米・味噌・醤油の貸し借り、子どもの

世話などを助け合うことができた炭住の生活はしやすかったという語りである。¹¹

また、根田氏は空知炭鉱主婦会の活動を積極的に担うことになり、最後は会長として、主婦会の活動をリードしていったことや、主婦会などの活動も、労働組合の活動を行っていた夫の理解がなければできなかったという点も聞き書きから見いだすことができる。その一方で主婦会役員のなり手は依然と少なかったことや、それゆえ主婦会の組織内の役割分担をどのようにするべきか、組織運営が課題であったこともうかがえる。これらの点は、多くの炭鉱主婦会でも見られる課題である。¹²

さらに、住友赤平炭鉱主婦会同様に、労働組合の家族

11 負の記憶がつきまとう炭鉱や、そこでの生活に対して、北海道の北炭幌内炭鉱での自身や父親の生活経験から「明るい炭鉱」の実態を分析した論考として、吉岡（二〇二二）がある。

12 例えば、北海道釧路市の太平洋炭鉱主婦会では、昭和四十七年に炭鉱主婦会の組織体制の変更を行った。執行委員会——支部長・副支部長——支部の班長——会員という構図で、班長は輪番制であったものを、一〇名の役員から五名の専従を置き、支部長も執行委員に変更された。また、事務所を開設し、有給の専従をおき、月一回の常会を開催した。その結果、支部行事が活発になり、トイレットベーパーの問題、乳幼児の医療費の問題などを支部ごとに取り組んだという。だがその一方で、専従役員や支部長に手当を出すことによって、主婦会の活動が任せ

会の集まりである主婦協議会での活動や、歌志内市内のさまざまな婦人団体との活動でも、会員数が多い空知炭鉱主婦会が主導的な活動を担っていたことも理解できる。そして、歌志内市にあった住友歌志内炭鉱主婦会の幹部が消費者協会を立ち上げ、生活上の問題に対して異議申し立てを行ったり、地方議員になったことも語られている。以上のような炭鉱主婦会による学習を媒介とした、女性の社会参加という側面は、日常生活や地域の問題を学習し、さまざまな市民活動を展開し、生活者の「代理人」として地方議会に議員を輩出した生活クラブ生協の活動内容に近い。首都圏や地方都市で展開された生活クラブ生協を都市部の女性運動の核がりと捉えるならば、炭鉱社会に都市社会的な要素を見いだすことができる¹³。

さて、根田氏は空知炭鉱主婦会会長だけではなく、道炭婦協会長も務めたが、空知炭鉱が閉山によって第二会きりになり、また「お金で活動する」という風潮が増えたという意見も挙がっている（太平洋炭鉱主婦会「母のうぶこえ」三六号（一九七八年五月）四五～四六頁）。

13 これらの炭鉱主婦会／炭婦協と生活クラブ生協の比較に関しては、別に論じることにした。

社となっていたことから、労働組合の幹部が、根田氏が炭婦協会長になることに否定的な発言をしたことが語られている。炭鉱の労働組合の上部組織である炭労（日本炭鉱労働組合）と、第二会社の労働組合の力関係もあるが、労働組合の保守的な考え方がよく表れており、逆に炭婦協の先輩幹部の柔軟な発想が理解することができだろう。つまり、男性中心の労働組合と比較した場合、先述した赤平市内の女性団体の対応と同様に、炭鉱主婦会や炭婦協といった女性中心の組織は、建前に対してより柔軟な応対をしていたことがうかがえる。

三人目は、夕張炭鉱主婦会の佐々木初江氏である¹⁴。佐々木氏の聞き書きからは、結婚後の炭住での大家族に

14 なお、筆者らによる炭鉱主婦会・炭婦協調査の中で、夕張炭鉱の主婦会関係者は、佐々木氏の他に二名いる。新夕張炭鉱出身で、道炭婦協の事務局長、会長を務め、炭鉱離職者主婦の会の事務局を長らく務めた、福井としえ氏（調査日：二〇一一年七月一〇日、一〇月二三日）と、夕張新炭鉱主婦会の会長を結成から解散まで勤め、その後夕張市議会議員、夕張市議会議長を歴任した秋元嘉代氏（調査日：二〇一一年八月一日）である。

秋元氏が二〇一二年五月に急逝され、福井氏も高齢であることから、聞き書きの作成にまでは至らなかった。なお、福井氏、秋元氏も含めた、夕張の炭鉱に関する女性の活動については、市原（一九九七）にルポルタージュとして記録されている。

よる生活や、炭鉱主婦会の役員の大変さを読み取ることができる。これらの点は、炭鉱に住む女性たちに共通した一般的な感覚であったと思われる。また、佐々木氏が配偶者を炭鉱事故で亡くし、その際の会社側の対応や自身の生活の変化も語られている。炭鉱で仕事をもつていないと、炭住での生活はできないため、炭鉱で主たる生計を立てていた家族が事故などで亡くなると、会社側から炭鉱の仕事を経営される場合が少なくない。佐々木氏の場合、斡旋された職場の環境が合わなかったことと、子どもの進学に合わせて、札幌に移住し、北海道炭鉱離職者雇用援護協会で働くことになった。この北海道炭鉱離職者雇用援護協会は、一九六八（昭和四三）年四月に北海道内の炭鉱の閉山、合理化に伴う離職者の再就職支援を担う機関として発足し、離職者の再就職斡旋（現地指導、再就職促進講習、求人開拓、定着指導、訪問相談など）や、離職者の教育問題（高校の転入）や老親の介護と産炭地での「置き去り老人」問題への対応などを行っていた¹⁵。

一方で、北海道内の炭鉱の閉山と合理化に伴い、仕事を求めて北海道の都市部である札幌に仕事を求めて

移動することが多い¹⁶という認識から、離職者の主婦のための集まりとして「北海道炭鉱離職者主婦の会」¹⁷が一九七三（昭和四八）年四月に結成された。「住み慣れた故郷を離れ、新天地での生活が、「炭鉱での隣人愛」とは違った都会の生活は厳しく、寂しい」という思いもあり、炭鉱離職者主婦の会では、会員同士の親睦を中心にしながらも、北海道炭鉱離職者雇用援護協会が行う炭

¹⁶ ただし、昭和五七年（一九八二年）一〇月に発生した北炭夕張炭鉱の事故以前までは、石炭政策による閉山・合理化によって離職者が発生する一方で、ビルド鉱（スクラップ・アンド・ビルド政策によって、坑内構造の改善、採炭機械の普及、自走枠の使用などの合理化された技術を用いた炭鉱のこと）による慢性的な労働力不足という状況もあり、「炭鉱復帰」が北海道炭鉱離職者雇用援護協会の活動の目標とされた（嶋崎、二〇一三）。

¹⁷ 炭鉱離職者主婦の会の事務局を長らく務めた福井としえ氏によると、北海道の炭鉱協会長だった多嶋光子氏が、「これからは離職者が札幌に集まってくるので、離職者主婦の会が重要になってくる」として、離職者主婦の会を作ることになったという（二〇一一年一〇月二三日の聞き取り）。そして、一九六七（昭和四二）年一〇月に「OM会」が発足した。この会は道炭婦協の役員と運営委員のみに入会が制限されていたが、昭和四八年に準備期間と議論を繰り返して、昭和四九年にOM会を解散、炭鉱離職者主婦の会に統合し再発足することになった。その際に炭鉱離職者主婦の会の発足日を昭和四八年四月一日とした（北海道炭鉱離職者主婦の会「20年のおいたちと歩み」）。

鉱離職者の再就職問題、年金、社会保険の問題をサポートし、子どもの学校や結婚の相談、病気の世話など「ヤマ」を離れて慣れない都会の生活の中で助け合いを行ってきたという。また、厚生年金の学習会などを行い、遺族年金の疑問点について厚生大臣に要請行動（一九七七（昭和五二年））を行ったり、閉山反対の座り込み、「平和闘争」（選挙活動）なども行っていた。そして、設立三〇年を迎えた二〇〇二（平成一四）年に、名称を北海道炭鉱離職者鉱婦会^{（こふかい）}とし、会員の親睦を中心とした会となった。¹⁸

佐々木氏は、夕張を離れた後も、札幌において炭鉱に関わる仕事と、仲間たちとともに過ごし、その活動の理念が継続していることを、選挙時の活動の語りに見いだすことができる。

さて、ここまで三人の聞き書きに関する概要を述べてきたが、本来はもう一人の聞き書きを収録する予定であった。それは、筆者らが主催した二〇一三年のシンポジウム（産炭地研究会（JAFCOF）編、二〇一四）でも登壇された、斉藤照子氏の聞き書きである。筆者らは、

18 北海道炭鉱離職者主婦の会「10年のおいたちと歩み」「20年のおいたちと歩み」、北海道炭鉱離職者鉱婦会「30年のおいたちと歩み」参照。

シンポジウムの内容を踏まえて、斉藤氏の聞き書きを作成しようと試みたが、その後、斉藤氏が体調を崩され、亡くなったことを二〇一五年春に三笠市の関係者から聞くことになった。ここでは簡単に斉藤氏の活動内容を紹介しつつ、本稿で収録した三名の聞き書きの内容との相違点を指摘しておきたい。

一九二九（昭和四）年に北海道南富良野村で生まれた斉藤氏は、一九五〇（昭和二五）年に、三笠市の北炭（北海道炭鉱汽船）新幌内炭鉱で働く夫と結婚し、一九七四（昭和四九）年に幌内炭鉱と新幌内炭鉱の労働組合が合併したことから、主婦会も北炭幌内炭鉱主婦会となり、その際に事務局長を務めた。一九七五（昭和五〇）年に北炭幌内炭鉱主婦会会長となったが、同年一月二七日に幌内炭鉱内でガス爆発事故が発生し、死者一名、負傷者七名の他、坑内に残された一三名の不明者を救出できないまま、注水消火することになった。¹⁹炭鉱事故の際に炭鉱主婦会会長として、遺族への応対などに奔走するほか、炭鉱事故後は幌内炭鉱が休業となり他の地域に外向することになったため、幌内に残された女性たちは

19 一九七七（昭和五二）年七月に一三名の不明者を収容することになった。三笠市・三笠市幌内炭鉱復旧再建市民会議編（一九七七）を参照。

生活上の問題（金銭、子どもの教育など）を抱えることになり、斉藤氏は主婦会会長としてこうした問題にも対応してきた。このような生活のさまざまな問題を解決するためには主婦会の役員が日々奔走する姿は、他の炭鉱主婦会でも同様であろう。

したがって、一九七七（昭和五二）年一〇月の幌内炭鉱の再開は、斉藤氏にとっては感慨深い出来事であった。斉藤氏は一九七九（昭和五四）年から道炭婦協事務局長にもなった。一九八三（昭和五八）年に夫の定年により主婦会を退会するが、その後も三笠市に居住し、三笠市民生協で活動するほか、女性の社会的地位の向上を目指した「女性の集い」の活動を行い、市会議員に女性を輩出することも行った。また、炭鉱労働者の中に中国からの強制連行者がいたことに対して、その慰霊祭を行う活動を三笠市日中友好協会として行っていた。住友赤平主婦会の米森氏と同様に、炭鉱主婦会の活動から離れても、その地域に居住し続ける場合、地域の女性団体での活動を継続していくことが見て取れるだろう。

以上、聞き書きの解題を述べてきたが、ここで述べてきた論点と聞き書きの内容を一次データとして、炭鉱主婦会・炭婦協の活動の変遷、炭鉱主婦会の地域社会での

位置づけと女性運動、団体の連続性などについての考察を別に行うことにしたい。

聞き書き① 米森康子さん（元・住友赤平炭鉱主婦会会長）²⁰

子どもの頃の苦勞が、炭鉱主婦会と赤平の活動に活きています

■父が茂尻炭鉱に入ったことが、炭鉱（ヤマ）との最初の出会でした。

私が生まれたのは、昭和一二年七月、大阪・高津町^{こうづ}四番地でした。おじいさんの代から玩具問屋をしていました。太平洋戦争が終わった後、玩具問屋はすぐに再開できなかったので、「しばらくの間」ということで、戦後直後に、父が茂尻炭鉱に行ったのです。あとから、私たちが家族も呼び寄せられました。昭和二年の秋、私が小学校一年生の秋に、北海道に生まれました。茂尻駅に着いた時

20 聞き取り日時…二〇一〇年八月五日、九月一日、十一月二七日、二九日、二〇一一年二月二七日、二月二日、二〇一二年三月一日、三月九日、三月一〇日、二〇一五年八月九日、二〇一六年八月二日、九月三〇日。

に覚えていることは、カボチャが（炭住の）出窓のひさしの上に干してあったことです。「カボチャが屋根にいる」という感じでした。

ですから、親は「大阪人間」で、姉などは大阪弁でした。私は七人きょうだいの下から三番目ですが、「米森さんは北海道の人？どこかアクセントが違う」と言われることもあります。家の中では大阪弁でしたが、外では北海道弁を使っていました。



■子どもの頃の苦勞が、今の活動に生きています

芦別^の野花^{かな}南小・中学校に通い、卒業しました。私は姉と妹がいたのですが、三人で近所の農家（松田家）に住んでいました。そのきょうだいの誰か一人を「もらい子」（養子）にしたいということだったのですが、私が一人、もらい子になりました。その農家の家は、私が

もらい子といわれないように、とても気をつかってくれましたし、かわいがってくれました。でも、とても忙しい農家だったので、中学時代は学校から帰ってきてから、家の手伝いをしていました。他の友達とは遊んでいる時に、農家の手伝いをしていたのです。

でも、農家はやりたくない、本当は高校に行きたかったです。いや、農家はいいのだけれども、自分は勉強しなかったんです。生んだ親には、「なぜ、自分が農家にもらい子にさせたのか？」といったかったけれども、今では言わないで良かったと思っています。でも、結局、「学校行きたい」という思いが強く、中学校三年の秋に、松田の家の親がいなかった時に、野良着のまま、茂尻の家に帰ったのです。松田の家から迎えが何度も来ましたが、私の母が「もう（娘は）帰りません」と言ってくれて、私は元の家族と一緒に暮らすことになりました。

茂尻に帰ってからは、近所の子守をやって、それから茂尻（炭鉱）の配給所で勤めることになりました。配給所では米から雑貨などを販売し、臨時職員の身分でした。

■米森家に嫁ぐ

（赤平駅の前にある）米森商店は、主人の実家です。

魚屋をしていました。

私が主人と知り合ったのは、赤平の東商店街に、居酒屋（おでんや）があり、職場の茂尻炭鉱の友達と食事をしていた時でした。当時、主人（昭和一九年生まれ）は定時制に通いながら、家業の魚屋を手伝っていました。私が二一歳の時に主人と結婚することになりました。

米森家の三兄弟は、三人とも赤間炭鉱で、労働組合に所属していました。北炭赤間炭鉱の労働組合は共産党が強かったのですが、戦後、レッドパージがあり、米森家の長男は検挙され、それで赤平デパートで魚屋を営んでいました。うちの主人は、一番上の長男に育ててもらったのです。主人は夜間高校に行きながら、魚屋を手伝っていましたし、私が嫁に行ったときは、主人は魚屋だったのです。

一番上の兄さんはいい人で、いろいろやってくれましたが、長男の姉さんはし



っかり者で、私は魚屋の仕事の手伝いをさせてもらえませんでした。そこで、赤平デパートの近くの大町にある呉服店で手伝いをするようになりました。ただ、近所の人から「どうしたの？」と言われるので、米森の家から出ることにし、主人が赤間炭鉱に勤めることになったのです。

主人は赤間炭鉱は七年ぐらい勤めました。採炭でした。昭和四八年に赤間炭鉱が閉山しました。退職金は五年より多かったと思います。主人が採炭として働いていたので、住友赤平炭鉱から声がかかりました。赤間炭鉱の多くの炭鉱夫は、同じ北炭系列の空知炭鉱に行きました。閉山後、主人の兄の三男は、千葉にある誘致企業に再就職しました。

私は最初は専業主婦だったのですが、その後、ニッシヨウ（スーパー）でパートをしていました。ニッシヨウの食堂のチケット売り場で仕事をしていましたが、鉱業学校（住友赤平高等鉱業学校）の高校生が食べに来て、のちに住友（赤平）の幹部になったときに「あのときは世話になった」と、その後、言われたりしました。また、（住友赤平炭鉱の）労働組合がニッシヨウの裏にあったので、よくご飯を食べに来ていましたね。

■炭鉱主婦会とのかかわりと、主婦会活動

私は、(主人が) 赤間炭鉱にいたときから、先輩に引ッ張られて、赤間炭坑の主婦会事務局次長をやっていた。当時は「組織」のことは全然わかりませんでした。最初は、配布物を担当する炭住の班長をやりました。各地区のとりまとめをする支部長は支部会議に参加します。事務局長は勤め人の女性(藤崎さん)だったので、私は三年後には支部会議をまとめる事務局次長になりました。昭和四八年に赤間炭鉱が閉山し、主人は住友赤平炭鉱の採炭として働くことになりましたが、私は赤間炭鉱で事務局次長をやっていて、住友赤平炭鉱のことも知っていたこともあり、住友赤平炭鉱の支部長となり、役員になりました。昭和五六年からは、会長をすることになりました。

私たち主婦会の活動は、「生命と暮らしを守る」というものです。戦後の日本を支えた産業は、やはり石炭産業だったと思いますが、(炭鉱) 会社は「出炭、出炭、出炭」と求めて、働く者や労働者の生命を守るということに、あまり力を入れていなかったように思うのです。

夫たちは危険な職場で働いています。出炭も大事かもしれませんが、何にしてもやはり「生命」を守ることが

一番だと、私たちは会社に交渉をしに行きました。でも、主婦会には交渉権はありません。労働組合が会社に交渉をして、私たちは廊下に皆で座り込みをしました。夫たちの職場を守ることで必然と先輩たちの(主婦会活動の) 流れを見ながら、私たちは引き継いできました。私たちの活動には、他にはない厳しさがあつたと思います。

主婦会の活動は、さまざまありますが、その基本には「生命と暮らしを守る」という点がありました。例えば、私たちは、夫の職場を守るために会社との交渉だけではなく、保安懇談会で救急法を学んだり、保安体制について会社や労働組合からの説明を受け、保安への理解を深めました。また、夫や息子の職場がどんな職場なのか、坑内見学(写真参照)も行いました。坑内見学を行うことに対して、最初、会社はなかなかいい返事をくれ



ませんでした。交渉の結果、坑内見学をさせてくれましたが、それは比較的安全な現場を見学するというもので、縦坑を降りて、広い坑道である『銀座通り』しか見せてくれなかったのです。でも、私たちは実際に働いているところをこの目で見たい、安全を確認したいという気持ちがあったので、会社と交渉を続けました。会社は、「坑内は女の神様で、女性を入れたくない」という話もあり、また、女性が見学に来ると仕事にならないということもあったのですが、その後、会社は、私たちの気持ちを理解してくれて、厳しい坑内の見学をすることができました。斜坑や、実際に採炭をしている場所も見せてもらい、「ベルトを踏んではいけない、落ちてしまうから」とも言われました。今から考えれば、よく会社も応じてくれたと思います。

私たちは、また、過酷な労働現場で働く夫や息子たちに、感謝を表すために坑口接待で、ソバを振る舞ったりしました。「おいしい」と、とても好評でした。

それから、「平和闘争」として選挙運動は真剣にしました。私たちの代表を国に送ることによって、私たちの生活につながるからです。市議会選挙も、道議会選挙もあったけれど、やはり国政が重要です。炭鉱主婦会の若い人を

選挙のウグイス嬢にしたり、さまざまな選挙活動の手伝いに派遣をし、私もさまざまな選挙に関わってきました。

一方、日々の暮らしに関わることでは、ニッショウ（スーパー）との懇談会で、品物をこうしてほしいという要望なども行ったり、食品添加物を少しでも避けるための学習会や、栄養のあるおいしいものをつくるための料理講習会を行いました。夫の仕事は体が資本ですから、おいしいものを食べさせてあげたい、それが家庭や会社のためになると思っていました。

それから、家計のやりくりをするために労金（労働金庫）学習会も行いました。もちろん、こうした学習会だけではなく、主婦会の運動会や旅行なども行い、主婦会の会員の親睦を深めていきました。

■主婦会活動の難しさ

厳しい中にも楽しさがある主婦会活動でしたが、減炭の影響で夫の給料が少なくなっている中、家族のために仕事をせざるを得ない女性が増えてきました。夫の職場は、一番方、二番方、三番方と変わるので、女性の仕事はパートにならざるを得ませんでした。でも、仕事をする女性が増えたことで、例えば、主婦会は夜の会議がで

きなくなり、活動が思うようにできなくなることもあり
ました。私たち主婦会は、女性の社会進出は望んでいま
したし、女性の働く場を作ることも主婦会の目的でした
が、働く女性が増えてきてから主婦会の活動が難しくな
ってしまったことは、少し皮肉なことかもしれません。
ただ、主婦会は他の組織（主婦協議会、婦人団体連絡協
議会）と連合して、保育所の設置を求める運動はしてき
ました。炭鉱の子どもは、母親が外で仕事をするようにな
った時に、その環境に慣れていかなかったからです。

ところで、私たち主婦
会の活動や生活は厳しい
ものであったからこそ、
「風呂敷を広げる」（お金
をばつと使う）ことあり
ました。昭和五〇年くら
いからでしょうか、赤平
市内に女性もお酒を外
で飲みに行けるようにな
りました。女性が外にで
て、バンド（の演奏）を
聞きながら、コークハイ



やカクテルを飲むようになったことも、女性の社会進出
の一つかもしれません。

私が住友赤平炭鉱主婦会の会長を引き受けてから六年
後の昭和六二年には、国内炭鉱切り捨ての第八次石炭政
策が始まりました。その後は各地で炭鉱の閉山が続き、
私たちはずっと閉山闘争をしていました。私は主婦会の
会長として、北海道や中央行動にも参加したりしました。
確かに、先輩方のように、炭鉱（ヤマ）がたくさんある
ときの活動も大変だったと思いますが、次々と周囲の炭
鉱が閉山に追い込まれていくのを見るのは切なかつたで
す。炭婦協を通じて閉山阻止の運動をしましたが、次は
自分のヤマが閉山になるのではないか、という気持ちが
ありました。その気持ちもあったから、閉山闘争に力も
入れたし、同時に不安でもあったのです。

ただ、閉山提案を受けた後の条件闘争のための陳情は、
とても辛いものでした。「ヤマを残せ」と言っている方
が楽だったかもしれません。

■政治とのかかわり——私が主婦会活動に一生懸命だつ
た本当の理由

他の炭鉱（ヤマ）の主婦会では、主婦会の中から（地

方）選挙にすることもあります。実は私にも声がかかったことがあります。最初は、私が赤間炭鉱にいたときに、共産党系の人から声がかかりました。その時の主婦会の会長（藤崎勲さん）は勤医協で看護婦をしていて、そのご主人は藤崎勲さんという共産党系の赤平市市議会議員でした。米森家は共産党系とみられていたのでしょうか。私が赤間炭鉱主婦会の事務局次長もしていたので、議員に誘われたのだと思います。私はその時は、社会党とか共産党とかわからなかったので、特に議員になるとか、考えていませんでした。

その後、主人が住友赤平炭鉱に移ってからは、私は住友赤平主婦会の会長や、道炭婦協の事務局長をし、「平和闘争」として、社会党の選挙活動はしっかりやりました。「平和闘争」は、国や（北海）道に議員を送ることで、私たちの生命と暮らしを守ることにつながるからです。私が平和闘争を、本当にここまでやってきた理由は、この住友赤平炭鉱に入ってから、「自分は社会党を支持している」ということを、周囲に知らしめたかったということもあります。先にも言いましたが、米森家は共産党系でしたから。

実は、住友赤平炭鉱が閉山した後、私が赤平市の男女

平等参画の活動をしていたこともあり、私を女性議員にしようという話がありました。対馬（孝旦）さんとか、国会議員が説得にきましたが、断りました。議員になると電信柱にも頭を下げなくてはいけないので、自分は遊び人ですし（笑）、楽しむところは楽しみたい、「自分の行動をしたい」という理由で、議員になろうという気持ちはありませんでした。それに、選挙にでると、すごい嫌がらせが電話できます。選挙運動をしていても、嫌がらせがくる。それを知っていたので、選挙に出ることはしませんでした。それに、主人の兄弟、家族は、共産党だったから、自分は社会党からでられなかったのです。このことは、その当時には話すことができませんでしたけれど。これ以上、家族に迷惑をかけたくはないという思いでした。

その後、私が選挙にでなかったのも、私は赤平の女性に選挙にできるように説得していますが、うまくいっていないのが現状です。

■赤平におけるさまざまな女性団体との関わり——炭鉱主婦会の「しなやかさ」と「したたかさ」

赤平にはさまざまな女性の団体があります。住友赤平

炭鉱主婦会は、赤平市の中で中心的な活動をしていたと思います。一つのまとまりとして、赤平主婦協（赤平地区主婦会連絡協議会）があり、総評系の労働組合の家族会が加盟していました。例えば、赤平市の職員組合家族会、北教組（北海道教職員組合）の家族会などです。ここでは主に、社会党議員のための選挙活動を行っていました。前に話した「平和闘争」です。

他には「生命と暮らしを守る」活動として、母親大会への参加や、物価値上がりの反対、合成洗剤追放など、生活の問題にも関わりました。

一方で、赤平市の女性団体の集まりとして、婦連協（赤平市婦人団体連絡協議会）があります。この組織は昭和二八年に発足しましたが、初代の会長は赤間炭鉱主婦会の会長で、その後、住友赤平炭鉱主婦会会長の阿久津トメさん、そして母子会（赤平市母子寡婦福祉連合会）の会長で、その後、北海道の母子会の会長も務めた森川梅子さんが会長をしていました。現在は、私が担っています。

この婦連協の中でも、住友赤平炭鉱主婦会は中心的な役割を果たしたと思っています。婦連協の目的は、女性の地位向上を図るというもので、あらゆる場所に女性を起用するというものでした。そして、そのためには女性

も勉強しなければならいと言われていました。

婦連協の皆さんとは、一緒に学習会や、バス旅行での研修などを行いました。そして、後になってから、赤平の婦連協は、まちをあげて、閉山闘争をしてくれました。また、周囲から「住友赤平炭鉱主婦会はママの仲間が住んでいるので、いいね」と言われていました。

森川会長は、森川医院の奥さんでしたが、早くにご主人を亡くして、母子会の会長をされていました。苦勞人



でした。本町の婦人部の推薦があり、赤平市の市議会議員もされていました。本町の婦人部からの推薦ですから、私たちと政治信条は違います。炭婦協の会長の一戸さんからは、住友赤平炭鉱主婦会が、自民党系の婦連協に関わることで怒られたこともあります。

私は、森川梅子会長は、思想信条は違うけれど、周囲のことを気にして言わない人が多い中で、きちんとものが言える、信念の強い方だと思っていました。仲間の悪口も言わないのです。私も森川会長のようにになりたいと思っていました。

でも、婦連協にはさまざまな女性団体が関わっていましたので、選挙の時には、婦連協の活動は「休会」なのです。そして選挙が終わると、元通りに活動をするのです。同じようなことは、炭鉱主婦会の中でありました。主婦会の中でも思想信条はいろいろあるので、選挙中は主婦会の活動を休む人もいますし、それを認めることもしていました。例えば、住友赤平炭鉱主婦会の中にも、新婦人の会の人もいました。でも、選挙の時は「休む」ということで割り切っていました。女性だから切り替えて、いろいろとできるのかもしれませんが。

前に述べたように、婦連協の目的の一つは、女性の地

位向上と社会参加を目指すというものでした。炭鉱主婦会は、役員は外にでていましたが、夫の仕事の関係で、普通は外で働くことはできません。でも、家族のために仕事をせざるを得ない女性もだんだん増えてきました。特に閉山後には女性がする仕事が増えました。閉山後、企業誘致がなされ、例えば食品加工の加ト吉は、女子型の仕事を多く、赤平にもたりました。その意味では、赤平では閉山後に、女性の社会参加が本格化したといえるかもしれません。

昭和五九年に「赤平市ふるさと女性の会」が発足しました。昭和五二年に「婦人の地位向上、福祉の向上と社会参加」を目指した北海道婦人行動計画が策定され、前年に赤平市婦人行動計画代表者会議（主婦協、婦連協、農協婦人部、消費者協会、母子会）が設立されました。婦人行動計画など言葉が堅いので、「赤平市ふるさと女性の会」という名前にしました。婦連協の会長が森川さんだったから、私が会長となりました。この会は男女平等婦人共同計画の策定のためのもので、「自立プラン」（昭和六二年）、「男女共同参画」（平成九年）、「男女平等参画推進協議会」（平成一四年）と計画目標を作ってきました。

ただ、赤平市ふるさと女性の会と、婦連協は、それぞれ役員のなり手がなかったので、二〇〇四年に一体化しましたが、この間の活動によって、女性の社会教育委員も増えてきました。

確かに炭鉱主婦会では、夫と息子の仕事を守るための活動をしてきましたが、炭鉱にはいろいろな人がいて、「男尊女卑」があつたと思います。昭和初め生まれの人も多かったのです、男女平等ではなかったと思います。ですから、女性の社会参加や、男女平等の活動は、大事だつたと思っています。

■道炭婦協との関わり²¹

私は昭和六一年に北海道炭鉱主婦協議会（道炭婦協）の事務局長になりました。その時の会長は、幌内炭鉱の田奈田さんでした。

炭婦協の先輩達はやはり厳しかったです。私が若かった時には、スカートを履いているのを忘れて炭婦協に行くくとすぐに怒られました。常に見える色のハチマキとズ

21 写真は労働省前の座り込み（一九八六年一月二六日）。炭婦協役員（右から二人目から米森康子氏、佐藤邦子氏（太平洋炭鉱主婦会会長）、根田久枝氏）。

ボンというのが、炭婦協の日常の姿でした。本当は私たちもかわいい女性なのですが（笑）、この闘いをしているうちに、いつしか厳しい女性になつてしまいました。でも、この厳しい活動があつたからこそ、今の私たちがいると自負しています。

ただ、私たちが炭婦協の役員になつた時は、多くのヤマが閉山になつていたこともあり、役員はみな若い年齢となっていました。

また、炭鉱の閉山や、定年退職によって、炭鉱を離れる人も数多くいました。炭鉱主婦会で役員をやっていた人は、炭鉱離職者主婦の会に参加していましたが、住友赤平炭鉱主婦会の先輩方も含めて、炭婦協や炭鉱離職者主婦の会などにはつながっていないように思います。炭労（日本炭鉱労働組合）でも、炭鉱ごとに力関係があり、住友赤平炭鉱は、一社一山でしたし、住友赤平炭鉱



の労働組合はなかなか炭労の役員にはなかなかなかったのと同じかもしれません。

■閉山後の地域組織の活動は、女性がリードしました

平成六年二月に住友赤平炭鉱が閉山してしまいました。ヤマの男性たちの多くは五〇歳過ぎていたので、他に異動することもできませんでした。ただ、赤平は炭鉱があった場所が地形的に恵まれていました。炭住が赤平市の中心にあったこともあり、閉山になっても、みんな赤平市に住み続けました。それゆえ、炭鉱が閉山になっても、人間関係は強かったと思います。例えば、芦別は炭鉱がヤマの方にあり、芦別の市街地に住んでいなかったから、炭鉱の人間関係がヤマの中だけだったと思います。赤平は町中に炭鉱があったこともあり、地域の人間関係がそのまま残ったのだと思います。

私たち住友赤平炭鉱主婦会は、解散と同時に「住友赤平炭鉱主婦会OB会」を結成しました。主婦会は会費制だったので、OB会も会費制にして、OB会の役員は閉山の時の主婦会の役員が決めました。閉山後、赤平市が関連するイベント——あかびら火まつり、らんフェスタ——にも、炭鉱主婦会の時と同じように実行委員会に

入り、OB会は協力してきましたし、住友赤平炭鉱閉山二〇周年記念の行事などにも、協力してきました。みんな、一致団結してがんばりました。

また、婦連協の活動に対して、赤平市は活動の助成金を出してきましたが、閉山後、財政が厳しくなり、活動助成金が切られるようになりました。婦連協の一員として、私たちは産直や椎茸販売、あかびら火まつりの時にはフリーマーケットなどをしてきました。

主婦会OB会以外の集まりとしては、まず、中高退協（赤平・中高齢者退職者協議会）があります。住友赤平炭鉱の退職者の集まりで、年間で二〇〇〇円の会費で新年会、旅行などで親睦を深めています。これらのイベントには男性の参加者が多いですね。また、この中高退協は、「平和闘争」のための組織でもあります。中高退協のメンバーの半数は女性で、炭鉱主婦会のメンバーもいますし、ここで女性議員を出そうという活動も行ってきました。

それから、労働金庫友の会という組織もあります。労働金庫に年金を振り込みにするか、一〇〇万円預けると会員になれるのですが、赤平での連合配下の定年退職者の集いです。ここにも主婦会のメンバーは入っています

が、男性たちは旅行などのイベントに参加しています。やはり、ヤマの仲間と一緒にいると安心するのではないのでしょうか。

最近、赤平でも炭鉱の遺産や記憶をもとにしたまちづくり活動が盛んになってきています。例えば、「がんがん鍋」（炭鉱長屋の石炭ストーブで、豚のホルモンや豆腐・野菜などを入れて、味噌ベースのスープで煮込んだホルモン鍋）の店も増えてきましたが、「本当のがんがん鍋は違う」と話す男性は多いのです。昔は馬車を使っており、その馬の肉を「がんがん鍋」に使っていたからです。こうした人は実際のイベントにはでてきません。

炭鉱の男性たちは、自分たちにプライドがあり、それが続いているのか、なかなか炭鉱の記憶を残す活動に率先して参加できていません。自分の夫さへ操縦できませんから、ヤマの男の気持ちはわかりません（苦笑）。ただ、ヤマでいろいろなことがあったので、男性の心の中に炭鉱のことは残しておきたいのでしょう。「ヤマのことは、俺たちの心の中にある」と話しています。私は、炭鉱遺産の活動に協力して、炭鉱のことを教えてあげてというのですが、「俺には関係ない」という返事をする人もいます。でも、炭鉱の仕事は、厳しく、それだけ大変だっ

た、心にそっと置きたいのだと思いますし、その気持ちは私にはわかるような気がするのです。

むしろ、女性融通利いて、みんなで仲良く、一緒に活動ができます。炭鉱のまちづくりは、労働者や労働組合がやっていたら、今とはもっと違った活動になっていたかもしれませんし、もっと労働者の方に呼びかけて、（労働者の方が）出てきやすい環境を作らないといけないのだと思います。

■私の今の活動

閉山後、私が個人として一番力を入れていることは、「病院ボランティア」です。

夕張市の財政破綻が問題となったように、赤平市の財政も厳しく、病院がなくなるのではないかという話がありました。私は赤平市民としてできること、みんなで一体化した活動をしようと、赤平市の社会福祉協議会に相談しました。そして、市立赤平病院（平成二七年から、あかびら市立病院）を残してほしいという運動を行い、また、社会福祉協議会を通して行った病院ボランティアを、主婦会のメンバーや他の市民と一緒に行うようになりました。例えば、一人暮らしの高齢者への安否確認の

電話や、看護婦さんがやっていた入院患者のタオルたたみ、病院案内もやっています。

病院の食堂（かあちゃん食堂、ぼらん亭）は、月曜日から金曜日まで開いています。調理師や栄養士がボランティアメンバーに入り、二二から二三名のメンバーでボランティアをしています。これらのボランティアをした理由は、我が町、赤平が困ったら大変になるからという思いです。

他にも、バレーボールに参加する若いお母さんの子供の世話のボランティアもしています。確かに、自分が遊ぶために、子供を預けるということは、少し疑問の部分はあるけれども、若い女性にも息抜きが必要だと思ふのです。若いお母さんからは感謝されています。

住友赤平炭鉱主婦会OB会は、平成二六年に一九年間の歴史を閉じました。会員が高齢化して、活動の継



続が難しくなったからです。ここまで続けてくれたことを感謝しています。でも、主婦会OB会のつながりは今も残っています。

私はずっと「元気印」でした。平成二七年に胃がんになりました。とてもショックで、手術もしないつもりだったのですが、ヤマの仲間から「がんばれ」「会長、いままではがんばってきたのだから」と助けられ、赤平で手術を受けました。他の市の大きな病院で手術をした方がいいのでは、とも言われたのですが、私は赤平市民なので、赤平の病院で手術をしたかったです。幸いにも、無事に手術は終わり、復帰したのですが、今度はヤマの仲間から「寝ておけ」と言われています（笑）。でも、また病院ボランティアを続けています。

こうして振り返ってみると、小さい時の苦労が、炭鉱主婦会の活動に活きていると思うし、これまでの活動も頑張ったのだと思っています。赤平のために、まだまだ頑張るつもりです。

聞き書き② 根田久枝さん（元・空知炭鉱主婦会会長）²²

夫の理解があつたからこそ、主婦会の活動ができました

■女性に学歴は必要ない？と書いていました

私は昭和十一年一月一〇日に、歌志内で生まれました。兄が六人いるので、私は七人目で、母親が四一歳の時の子どもでした。両親は女の子が欲しかったのでしょう。とっても大事にされました。本家はハンコ屋で、炭鉱とは縁がありませんでした。

私は歌志内第二小学校と歌志内中学校に通いました。

二人の兄は戦死し、三番目の兄も戦地に行き、身体を悪くして入院しました。三番目の兄は勉強が好きで、よく本を読んでいました。太閤記が大好きだったことを覚えています。入院中に病院の先生から、「警察官にならないか。そのための勉強の本を渡すから」と言われ、その後、兄は警察学校に通い、刑事として満州で終戦を迎えました。終戦から二年を過ぎてようやく帰国しました。

22 聞き取り日時…二〇一〇年一月二五日、二〇一二年二月二六日、
二月一九日、二〇一三年六月二四日、九月三日、二〇一五年八月一〇日、
十一月九日、二〇一六年六月二〇日、十月三日。

一方、私は、「女性は裁縫とか習って、お嫁さんになるのがいい」と思っていました。明治生まれの母は、国のためにと戦争で二人の兄を亡くしたことで、「女性には手に職を持つことが大切、自分の身に何かあっても生きていける」と話していました。

中学校の進路指導の時に、浜部先生から「どうして高

校に行かないの。無理に勧めはしないが、これからは女性も学歴社会になるので、高校を出ていないと後悔する時が来る」と言われました。その時は、炭鉱主婦会の会長なんてするとは思わなかったから、勉強した方が良かったかもしれない。私は、兄が学校に行きたくても行けずに兵隊に行ったこと、手に職を持つことが大切だと母から言われていることを先生に話し、「（進学しないことを）絶対に後悔しません」と話しました。私も頑固な子どもでしたね（笑）。が、今、思うと失言だったと思



いますし、私の将来のことを考えて進学を勧めてください。先生に感謝しています。

それから、高校に進学した仲の良い中学の同級生の女性がいたのですが、彼女が高校に入ってから、私の家に訪ねてきて、「高校に行かなければよかった」と話すのです。私が「どうしたの？」と聞くと、彼女は、高校の先生から「君たち女性は何を目的に高校に進学したのか、花嫁の一つの履歴書のためか」と言われて、啞然として学校に行く気力がなくなったのです。女性というのは家庭に入り、男性に尽くすのが当然だと先生から言われたと。その子は、そう言われて学校がいやになり、中退して東京に行っていました。

■炭鉱（ヤマ）へのかかわり——就職と結婚

終戦後、満州に行っていた三番目の兄は、北炭空知炭鉱の坑内の採炭になりました。仕事がなかったからです。その後、三番目の兄は結婚をして呂久志^{ろくし}の炭住に住みましました。また、すぐ上の兄が、昭和二〇年の秋に、千葉から帰ってきて、北炭空知炭鉱の選炭機の職員として務めることになりました。私は両親と本町に住んでいたのですが、昭和二五年に父親がなくなり、母と私は昭和二九

年にすぐ上の兄の炭住に引っ越すことになりました。炭住生活の始まりです。

私は、中学卒業し、二年間洋裁学校に通いました。昭和二九年空知炭鉱生活協同組合（昭和二七年に開始）の職員の募集があり、試験を受け合格して、昭和三〇年四月から炭住の中にある店舗で売り子として勤めました。

生協の店舗は全部で五つありました。東光三区にあった本店、東光一区、本町、歌神^{かしん}、呂久志^{ろくし}にありました。売り場では食料品、衣料品、お菓子、魚肉、青果などがあり、商品は現在と違って、量り売りだったので、大変でした。私は五つの店舗で売り子をしながら、伝票の整理をしていました。忙しかった時は、毎月一五日の炭鉱の給料日で、多くの人が買い物に来た時でした。また、秋になると炭鉱の人は漬け物を漬けるために、大量の「越冬野菜」を買います。例えば、大根は一軒で一〇〇本ぐらい買ったりします。この他にもキャベツ、白菜、体菜などを炭鉱の人はたくさん買うので、車で夜遅くまで配達するため、秋は大変な時期でした。

夫との出会いは、歌志内のダンスホールでした。このダンスホールは個人経営で、私の家の二階からはよく見えました。その時期、炭鉱青婦協が主催したダンスパー

ティーで主人と知り合いました。

当初、母からは、炭鉱の仕事が危険であるという理由で、主人との結婚に反対されました。しかし、母自身が他人から勧められて結婚をして、とても苦労したことから「私が好きな人と一緒になるならば、苦労をしてもそれは自分で選んだ道だから、あきらめもつくし、後悔もしないのではないか。好きな人だったら好きな道を歩んだ方がいい」と話してくれて、主人との結婚を認めてくれました。そして、私は昭和三四年に結婚しました。勤めていた生協は結婚したら辞めなければなりませんでした。私がお嫁に行くことになったとき、周囲の人から「炭住は近所つきあいが大変だ」と言われていました。私は炭鉱の生協に勤めていたのでそう感じてはいませんでした。でも、「炭鉱とは大変なところで、口がうるさいところだから、覚悟を決めて行きなさい。何を言われても馬鹿になっているか、あの人に何を言っても、逆にやり返される、という感じにならないといけない」と言われたことがあります。

■北炭空知炭鉱から、空知炭鉱株式会社へ

私が結婚して炭鉱での生活が四年過ぎた昭和三八年、

北炭空知炭鉱が閉山し、第二会社として空知炭鉱株式会社が発足しました。組合員は一八〇〇人から五八〇人と減りました。炭鉱の閉山にもなって、東京、神奈川、静岡など内地から仕事の募集が来ました。道内では苦小牧からの求人もあり、新たな仕事を求めてヤマを去って行く人も多かったです。そのため、閉山前後で炭鉱住宅も空き家が多くなり、炭住を取り壊すこともありました。私は東光一区から三区に閉山前に引っ越しをしました。

このような中で、空知炭鉱株式会社ができたことで、ヤマの再建が本当にできるのか心配ではありました。その一方で、赤間炭鉱（昭和三八年閉山）、万字炭鉱（昭和五一年閉山）、真谷地炭鉱（昭和六二年閉山）など、北炭関係の皆さんが空知炭鉱に来たという経緯もあります。

昭和三八年に空知炭鉱労働組合が結成され、空知炭鉱主婦会は昭和三九年にそれまでの主婦会活動と一区切りする形で発足しました。塩川しげ子さんが最初の主婦会の会長で、次に幌別炭鉱出身の玉井友子さんが会長になりました。玉井さんが会長になってから、主婦会の活動は活発になったと思います。例えば、ソフトボール大会を主婦会で行うなど、みんなで会う機会を増やしたからです。

そして、北炭系の炭鉱の閉山が続く中で、他の炭鉱から空知炭鉱に来る人もいます。そのような人に対して、炭鉱主婦会では歓迎会を開きました。「ここ（空知炭鉱）も一度は閉山したヤマです。皆さんとともに、お互いに頑張っていきましょう」と誓い合いました。

■空知炭鉱主婦会への参加と活動内容

炭鉱に入ると、女性には炭鉱主婦会に全員加入しますが、空知炭鉱主婦会が発足した当時、私は育児中で主婦会に積極的に参加することはできませんでした。

私が主婦会の活動に関わり始めたのは、昭和四十一年からでした。子どもの幼稚園のPTA会長をしたことから、主婦会の活動に声をかけられ、私は最初から「幹事」として新聞の回覧を回したり、物品の販売をしたりしていました。主婦会の組織の構造は、幹事の上に支部長がおり、本部の役員から支部長―幹事と連絡が伝わるようになっていました。最初は幹事だった私も、自分が所属する支部長（田中和江さん）が本部役員になったので、私がその後任の支部長になりました。昭和四十六年の時です。

主婦会の役員として出る人を探すことはとても苦労しました。皆さんに回覧板を回したり、「今日は何々があ

りますので協力を！」と呼びかけをしたりすることについては、皆さんが引き受けてくれるのですが、その上の役員として皆さんを纏めて行くという役目については、なかなか引き受ける方がいませんでした。

その後、私が本部役員になりました。本部の活動として、主婦会の中に教宣部を作りました。これは主婦会の中でソフトボールや運動会などのイベントを企画する部署です。北炭神威炭鉱の主婦会や、北斗炭鉱の人が空知炭鉱に入ってきた時に、主婦会の本部のスタッフが増えて五名となり、会長、副会長、事務局長、会計、教宣部という体制になりました。私はその時は一番若い役員だったので、教宣部を任せられました。その後、会計、そして会長も引き受けることになりました。

私は主婦会の役員を引き受ける時に、夫に相談しました。夫は「自分も守って欲しいのと、他の家庭の夫のもとに守ってくれるのは、やはり主婦の力だろう。もし（私が）できるのであれば是非協力をしてあげなさい」と言ってくれました。それからずっとその活動を続けながら、会長になったのは昭和五十六年です。その後、事情があって一年ほど役を下りましたが、その翌年にどうしても役員がいないので、会長をやって欲しいと言われて引き受

けました。そして昭和五九年に空知炭鉱主婦会の結成二〇周年を迎えました。

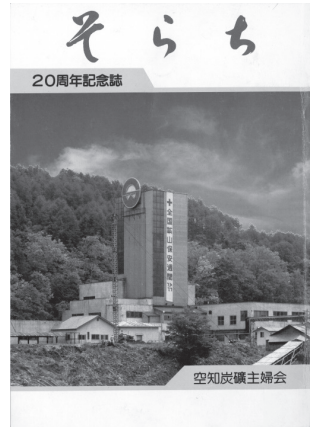
空知炭鉱主婦会結成二〇

年の時に、祝

賀会と記念の冊子を作りました。記念冊子を作る時に、労働組合の教宣部に相談し、これまでの主婦会の活動についての書類を貸してほしいと頼んだのですが、「二〇周年の記念冊子なんて、できるわけないから、やめれ」と言われました。私はやってみないとできないと感じたので、前役員の方々と「やってみてから判断します」と一言いって、その後、企画をして二〇周年の記念誌はできました。冊子の費用はすべて私たち主婦会が出しました。

■主婦会会長としての歌志内でのさまざまな活動

空知炭鉱主婦会の会長になると、炭鉱主婦会以外の組



織との関わりもできます。例えば、主婦協議会というのがありました。これは、労働組合の地域組織である地区労の横のつながりで、北教組（北海道教職員組合）の婦人部の組織が入っています。歌志内の主婦協は、北教組と、空知炭鉱主婦会だけでした。

この主婦協では、選挙関連の作業をしていました。国政だけではなく、地域の選挙のための活動や、メーデーのための活動をしていました。主婦協は地区労とともに活動し、会議も一緒にでていました。

もう一つ、歌志内市婦人団体連絡協議会（婦連協）という組織がありました。本町、歌神、文殊、中村などの地域の婦人部も加入していました。歌志内市に関わる活動をしており、母子家庭の問題や、教育問題、物価の問題などを学習し、北海道などに陳情に行きました。北海道全体の婦人団体連絡協議会の活動としては、北方領土の問題があり、私たちが活動に協力しました。婦連協はどちらかというと自民党系の組織ですが、地域の婦人部の人たちは選挙運動をすることはありませんでした。

それから、歌志内にも、消費者協会があります。住友歌志内炭鉱主婦会の鳥越キミさんが作りました。物価問題や、体に害がある添加物の問題、悪徳商法に対してや、

灯油やガソリンの値上げに対しても直接、交渉に取り組みました。鳥越さんははつきりものをいう人だったので、嫌う人もいましたが、嫌われてもみんなのために活動をしているし、私はすごい人だと思いました。鳥越さんは歌志内の市議会議員もしていました。また、北海道消費者協会の副会長でもありました。

■炭婦協の会長になる

私は昭和六三年に北海道炭鉱主婦協議会の会長になりました。

前の会長は田奈田さん（幌内炭鉱）で、前の前の会長の一戸さんから「会長をやって欲しい」と頼まれました。炭婦協の会長になる際には、（空知炭鉱の）組合の委員長にも話をするのですが、その時の委員長の話は忘れることはできません。組合の委員長は、「第二会社の空知炭鉱には、道炭婦協の会長なんてとんでもない」と話したのです。

炭労は、私が第二会社出身の主婦会長で、空知炭鉱の労働組合からは炭労の委員長もでていなかったもので、炭婦協の会長になることに反対だったようです。でも、一戸さんは「今は、大手（炭鉱）も、第二（会社）もない。



今は、一体にならないといけない」と話をしてくれました。炭労と炭婦協には違いがあり、女性には夫の協力がなないと役員ができないということもあり、私が道炭婦協の会長になりました。この一年は、北海道炭鉱主婦協議会の会長と日本炭鉱主婦協議会の会長をかねていました。

私は道炭婦協の幹部の方から気に入られ、かわいがられたのだと思います。いろいろな話を先輩方から伺いました。例えば、労働組合の男の人は、会社とのつきあいとかもあるので、会社との交渉の中で酒を飲まされると

妥協するようになってしまふ。女性は一度決めたことは変えないし、炭婦協の女性は一切、動揺はない。これが炭婦協の強さだ。

炭労の四〇周年記念の時には、炭婦協の元会長だった一戸キヨさん、五十嵐光枝さん、福井よしえさんと東京に行ったりました。北炭系の炭

鉦主婦会の役員経験者の集まりがあったのですが、そのときに私も誘われました。その後も、元炭婦協の幹部の方のおつきあいは続きました。

■夫のこと

夫の仕事ですが、坑内の掘進でした。北炭空知炭鉦は昭和三八年に閉山となり、昭和三九年に空知炭鉦株式会社になりましたが、そこで定年まで働きました。空知炭鉦が第二会社になる前に、坑内見学をしたことがあります。夫は真つ暗な中、キャップランプ一つで死と背中合わせで働いていることがわかりました。坑内に入るとどれが自分の夫なのか分からないくらい真つ黒な顔をして、私が「ご苦労様」と声を掛けると、夫が「ありがとう」とにこりと笑って返す、その歯だけが分かる、そのような現場で働いていたわけです。私は主婦として夫を大事にしながら、この運動を精一杯続けていかなければならないと思っていました。

夫は組合活動も積極的に行っていました。昭和四二年に組合の支部長になりました。一週間の仕事の割り振りをする「番割」という仕事でした。その後、組合の保安監督補佐員、保安部長、労働部長をし、最後は書記長にま

でなりました。私が主婦会活動をしていたので、「よく二人で活動している」と言われました。でも、やはり夫の協力無しでは、主婦会の活動はなかなかできるものではありませんでした。また、私の二人の子どもの面倒は、私の母がみていました。だから、私の下の息子は、今でも私の母（祖母）の写真を飾り、水をあげています。また、母も私の息子をとてもかわいがっていました。

夫の定年は、平成元年でした。ある方が砂川駅前で小料理屋をしていて、夫が定年になると手ぶらになるので、お店を引き継ぐ形で砂川に來ないかと誘われました。

夫は寿司は握るし、ラーメンもできるし、おでんを作るのがうまかったのです。私たちは砂川に引越して、小料理屋を始めることになりました。このお店には歌志内の役所の人もわざわざ来てくれました。

ただ、この小料理屋は、商売ではなく、軽い気持ちで始めました。夫は人に飲ませるのが好きだったのです。夫は組合活動をしていましたから、家で仲間にお酒を飲ませることは多くありました。でも、夫は夜九時には眠くなってしまうので、その時間には店を閉めてしまいましたが。

小料理屋はまったく儲かりませんでした。例えば、炭

鉦の奥さんが漬け物や煮付けを持ってきてくれると、それをお客さんに振る舞っていました。知人からもらったもので、お客からお金をもらうわけにはいきませんよね。だから税理士の人に「ずっと赤字でしょ」と言われました。でも、お客さんの顔を見ると、お店はなかなか辞められないのです。夫は組合活動をしていて、私も主婦会活動をしていましたから、人付き合いいいし、人と話すのは慣れていましたが、商売には向いていないと思います。結局、このお店は七年間続けました。

炭鉦で働いている時には病氣一つしませんでした、定年になってひと安心したのでしょうか、それまで働いていた気持ちが緩んだのでしょうか。病魔に侵されまして、それから二五年間病院へ行ったり来たりして、とうとう平成二五年八月にこの世を去りました。

シンポジウム²³についても、夫と話をしていました。夫は、「そうか、お前がもし上手く皆さんに話を出来る

23 二〇一三年一月三〇日に実施された「空知の炭鉦（ヤマ）の女性たちが語る集い——炭鉦主婦会・炭婦協の歴史に学ぶ——」（主催…産炭地研究会（JAFFCOF）・札幌学院大学、後援…NPO法人炭鉦の記憶推進事業団）のこと。このシンポジウムの記録は、産炭地研究会（二〇一四）を参照のこと。

のなら、行つて話をちゃんとして来なさい」と、亡くなる前のことですが、そう言ってもらいました。本当のことをいうと、シンポジウムで話すことも自重しようと思つていたのですが、夫が後押ししてくれたので、話をすることを決意したのです。本当に夫の理解があつてこそ主婦会活動だったと思います。

■これまでを振り返つて

生まれてきてこれまでの自分を振り返つてみた時に、「これが自分に与えられた人生なのかな」とすごく感じます。もちろん、こういう道に進めばよかったのかと思つたり、親に反発して、学校に行つていたら、別の人生があつたのかなと思うこともあります。でも、今は「これでよかったのだ」と自分に言い聞かせています。砂川に引越してきて二七年間、経ちましたが、今も町内会の役員をやっています。

こういう性格ですから、「だめものはだめ、いいものはいい」という炭婦協の考えが染みついているのだと思います。決めることについては、男も女もない。いいものはいいい、悪いのは悪いのです。年齢とともに特に強く思うようになりました。

聞き書き③ 佐々木初江さん（夕張炭鉱主婦会）²⁴

勉強になった炭鉱主婦会の活動

■夕張で生まれて、帰る

私は昭和十二年一〇月一九日に、夕張市で生まれました。父は北炭機械（夕張製作所）の大工でした。本町二丁目の郵便局の本局の上に住んでいましたが、その後、コークスを作っていた化製工業所の近くの家に引っ越しをしました。昭和十八年に若菜小学校に入学して、終戦の時は二年生でした。私は、昭和二四年に千代田中学校に入学しました。

千代田中学校には、鹿ノ谷小学校、若菜小学校、富野小学校の子どもが通っていましたが、富野小学校は、農村地帯の小学校で、栗山町に近いところがありましたので、中学校に来たのは二名ぐらいだったと思います。私は、昭和二八年三月に中学校を卒業しました。

私は祖父母にかわいがられて育てられ、ものすごくわがままでした。実は祖父母とは血のつながりがなく、私

の母親が祖父母にもらわれて、父が養子に入ったのです。父は自分の姓を名乗っていましたが。

養祖父母からものすごくかわいが

ってもらったので、母親は私をうんと厳しいところに女中に出さないといけないと思っていました。七人きょうだいで、生活も大変だったし、私が進学をするという話はありませんでした。昭和二九年に一番下の妹が生まれて、下のきょうだいは学校に行ったから、長女は損だと思いました。今後、生まれてきた暁は、末っ子になってかわいがってもらいたいのです。

東京で女中奉公に行くことについては、父の知り合いが紹介者になってくれました。私も東京に行きたいという気持ちもありました。そして、昭和二八年五月に、母に連れられて、東京の世田谷区の上馬町に行きました。上野駅からみえたネオンサインがきれいだったことが印象的です。世田谷のお宅の向かいには田んぼもあって、



24 聞き取り日時…二〇一六年六月二〇日、八月四日、一〇月三日。

農家だったと思います。

ご主人様は丸善石油の重役で、私よりも八歳年下のお嬢さまがいらっしゃいました。

私の仕事は、まず、朝はお嬢様が先に車にのって私立の学校に通い、帰ってきてからご主人様がその車に乗って会社に行くのですが、そのお見送りをしました。私はその後、洗濯と掃除をしました。水はポンプでくみ上げ、その水で洗濯をしました。冷蔵庫もあり、毎朝、氷屋が来て氷を冷蔵庫の上に入れて、冷蔵庫の下にたまった水を捨てることでした。午後からは奥様の買い物について行きました。

私は身長が低くやせっぽちだったのですが、風邪を引いて扁桃腺が腫れてしまいました。雇い主は結核かと思ったのかもしれませんが。四ヶ月半で雇い止めとなり、北海道に帰ることになりました。上野から青森まで汽車で、そこから青函連絡船に乗り、函館で父と、私の妹が一緒に迎えに来てくれました。父は江差出身で親戚もいたからです。その後、夕張に帰りました。

夕張に帰った後は、追分の豆腐屋、魚屋に勤めたり、女中にいったりして、最終的には雪印カッゲンに三年か四年ぐらい勤めました。そして二三歳の時に結婚をして仕事を辞めました。私の父と夫のおじさんが知り合いで、

昭和三四年一月にお見合いをしました。

お見合いの後、夫と二人で映画を見に行ったのですが、実はその後、夫は二番方の仕事に行きました。お見合いの後ですよ。私はその時、夫のことを「まじめな人」だと思いました。そして、一年ぐらいつきあって、結婚をしました。昭和三五年五月二八日のことでした。

■炭鉱での生活

私の夫の仕事は、坑内で支柱を作っていました。その後、採炭をすることになりました。結婚してから炭住に住み始め、初めて炭鉱を知りました。

夕張第二小学校の分校が福住五区にあり、その分校の跡を住宅用に改装した場所に最初は住むことになりました。トイレも流しも共同でしたが、そこしかあいていなかったからです。約四ヶ月、そこで住んだ後、会社から住宅希望を募られたので、夫の実家が高松一区にあったので、その近くに住むことになりました。

その住居は、居間が四畳半、台所が四畳半、二階が九畳の部屋でした。骨組が見えて、ネズミがいました。ネズミが運動会している感じです。昭和三十六年三月七日に長女が生まれましたが、「ネズミに（子どもが）かじら

れるかもしれない」と思い、二階には子どもを寝かせませんでした。また、水道も共同で、住んでいる人が個人で水道管を各家庭に引いていました。朝六時に、水道の栓を開け、夜八時に水道の栓を閉めるといふ、水道当番が一週間ごとに回ってきました。冬は元栓を開けるためにお湯をかけました。

下の子どもが生まれる前に、夫の父が定年前でしたが、会社を辞めることになり、親と同居することになりました。その高松一区の家は、台所四畳半、六畳の部屋が二つ、廊下があり、トイレ、水道も家の中になりました。

玄関の脇に一坪の物置もありました。でも、夫の兄弟は一〇人でした。お姉さんがお嫁に、二人の弟は結婚していましたが、その他の弟が七人、夫の両親と、私と私の子どもという、大家族の生活でした。その家は、長屋の端っこだったので、納屋につなげることもしました。昭和四〇年三月九日に次女が生まれましたが、妊娠中は奥の部屋に寝ることもできたのですが、大家族での生活は大変でした。

夫が一番方の時は、早起きして、二番方の時は、夫を送った後は、すぐに家族の夕ご飯の世話をしました。夫が帰ってきて、夜に晩酌するから、朝食は姑にお願いを

していましたが。また、一ヶ月で九〇キロのお米を食べました。私はずっと家族の食事の世話をしていました。まるで女中さんみたいでした。

実は姑よりも舅の方が大変でした。舅は、養子だったのですが、態度が大きかったからです。舅は、会社を辞めた後、少しは働いていましたし、姑はお米を買ってくれましたが、その他は、夫の給料から、生活費を出さなといけないわけです。夫はまじめで、月四回の休みのうち二回は出勤してくれました。

兄弟の一人が集団就職して、夕張に帰ってきてから、北炭夕張に採用（鉱員）となり、社宅を得られたので、義理の両親や兄弟はそこに住むようになり、昭和四〇年からの三年に及ぶ大家族生活は終わりました。

■炭鉱主婦会とのかかわり

炭鉱主婦会との関わりは、大家族で暮らしていた昭和四三年頃でしょうか。夫の先輩の人から「主婦会のなり手がいない」という話があり、「自分の妻も主婦会の役員をさせるので、佐々木さんに主婦会活動に手伝ってほしい」と言われました。主婦会の仕事は勤めの仕事と同じくらい大変で、しかも無給でしたが、役員をやることになりました。

炭鉱主婦会の組織も、労働組合と同じで本部役員と支部役員に分かれていました。

夕張はとても広いので、会社は北炭と同じですが、夕炭労（夕張炭鉱労働組合）、新夕張炭鉱労働組合、平和（炭）鉱、清水（炭）鉱、真谷地、登川とそれぞれ労働組合がありました。炭鉱主婦会の組織は、丁末（ていみ）、小松、錦、福住、高松（五区まで）、杜光（三区まで）、新夕張（三鉱）がありました。

私は高松三区の支部役員になり、その数年後、仙台で開かれた第一八回日本母親大会（一九七二年）²⁵に参加しました。

仙台の会場は、狭かったことを覚えていますが。午前と午後の二回に渡り、子どもと教育について、夫が危険なところで働いているので保安の問題などの話を聞いてメモをとりました。夕張に帰ってからは、報告書を書いて、母親大会に行った二人（もう一人は後藤さん。この人は有名な共産党員の奥さん）で、図書館から幻灯機を借りてきて、地域で報告をしないとイケなかったのです。地

25 日本母親大会・第一八回宮城大会は、一九七二年八月二〇日～二二日に開催され、参加者はのべ二六〇〇人。記念講演として、評論家の丸岡秀子氏による「いのちへの願い」が行われたほか、全体会（二部制）、分科会が開かれた。（出典：日本母親大会ホームページ（http://www.haohoyataika.jp/04_ayumi/kenpyou/index.html）、二〇一六年八月二〇日アクセス）。

域によっては昼、夜とかわけて、木綿の風呂敷に幻灯機を包んで、各地区に回り、報告をしました。

この母親大会に行ったことで、夕張炭鉱主婦会の本部の役員をやることになりました。また、学校の、PTAや生協の役員を引き受け、多いときは朝昼晩と会議でした。生協などは夜の会議が多かったですし、PTAの評議委員会（三〇人くらい参加）が二、三ヶ月に一回合合があり、これも夜でした。さらに娘の中学校のPTAの学習部の部長もしました。

思い出深い出来事は、娘が通っていた小学校の給食室の話です。当時、学校はおんぼろで、人口が増える中、山の斜面に上に上にと建物を増やしていき、学校の中に職員室や給食室が二つある状況でした。小学校一年生の娘の給食室はとても離れていたもので、子どもの給食の手伝いを親がやるということを条件に、親が掛け合って教室を変えてもらったことがあります。母親があまり働きに出ていないこともあり、手伝うことができたのだと思います。

炭鉱主婦会の本部役員ですが、最初は生活部として物資の斡旋を行いました。当時は下着や生理用品などもありおおっぱらになかったので、年三、四回、共同購入

をして物資の斡旋をしました。その後、四年くらい事務局長をしました。

私は義務教育しかしていないのに、主婦会の活動報告はB4で七枚ぐらいあり、その原稿を読み上げるだけでも大変でした。難しい漢字にはふりがなを振りました。定期大会の時は、夕張会館という映画館で行ったのですが、あの広い舞台で読み上げるのは、足が震えましたよ。

■夫のこと

夫の仕事は、最初は坑内で支柱でした。その後、採炭に昇格しました。とてもまじめな人でした。その主人は、昭和五二年一月二八日に事故で亡くなりました。

当日は、私は夕張にはいませんでした。全道の消費者協会の大会が札幌であったからです。当日の朝、夫は一番方だったので、私がお弁当を持たせて、それで札幌に行きました。

夫の妹から「怪我をしたから帰ってこい」と言われて、札幌の中央バスのバスターミナルでバスを待っていました。そこで私の名前のアナウンスがあり、電話に出ました。その時の主婦会の会長から「その場を動くのではない」と言われました。私は主婦会の会長と一緒に営業

車（タクシー）で夕張に向かいました。主婦会の会長は、車の中では何も話をしませんでした。私も何も言わないで、無言で車に乗って、病院に行きました。

病院に着くと私の妹がいて、「姉さん、遅かったね。兄さん、もう家に帰ったよ」というので、すぐに自宅に帰りました。

一月の末でしたが、玄関の戸は開け放たれていました。子どもは、制服のまま、座敷にうなだれて、座っていました。私は泣いている暇はありませんでした。葬儀の準備は進み、会社の人が手伝ってくれました。

「思いがけないことがあると、漬け物がだめになる」という話を聞いたことがあります。夕張では一〇月末には漬け物を漬け終わっています。たくわんを五〇〜六〇本漬けるのです。大根を荒縄で編むのは主人の仕事でした。白菜を漬けたものを葬儀の時に出して食べてもらいましたが、鯀漬けのキャベツが紫色になっていました。食べられなくなったキャベツは、その時に捨てました。

夫は殉職扱いとなり、労働災害も適用され、遺族年金ももらえましたが、葬儀の時の会社の対応には腹が立っています。夫の葬儀については、殉職だから会社の経費で出せるし、けちけちしないという話があり、葬儀の香

典返しも普通は砂糖が二キロなのですが、殉職だからもう少しいいものを、ということで三キロにしましたが、実際に会社は何も



してくれませんでした。夫の弔慰金は一三〇〇万円、一〇〇〇万円を口座に、三〇〇万円は現金で出納係から受け取ろうと思ったら、二五〇万円しか現金でもらえませんでした。会社の課長の名前で受け取っていた五〇万円は、香典ではなく、葬儀に金がかかるからという理由で弔慰金を前もって出したものだというのです。私は、夫の命の値段が一三〇〇万円だったことにもショックでしたが、このような会社の対応も疑問を持ちました。

それから、現金五〇万円を足して三〇〇万円を、私は夫の両親に渡しました。一番悲しいのは両親かと思ったので。嫁が夫の両親にお金を渡すというのは聞いたことがなかったですが、私はそうしたのです。²⁶

²⁶ 写真は、夕張新鉱の事故（一九八一（昭和五十六）年）の翌年にできた慰霊碑の前の佐々木氏。慰霊碑には夕張炭鉱で亡くなった方々の名前すべてが記載されている。

■夫が亡くなった後の生活

夫の死後、昭和五三年三月に私は夫の会社に採用されました。会社の労務から連絡があり、「どこで仕事したいのか」と聞かれて、私は女だけの（環境の）仕事は、妬みとか大変だと思ったので、福住二区の労務連絡所の助手を希望しました。

でも、上司が悪かったのです。今でいうセクハラに遭いました。私が朝、事務所に出勤すると、上司は夕べの酒が残っていて、部屋もくさかったです。

同僚には私と同じような立場の人が何人いました。でもその同僚との雑談に私が加わるといやがられました。同僚からは、「あなたは年金をもらっているのに働く必要がない」とうらやむようなことを言われました。他の人は労災を一時金でもらっていて、（昭和四三年から制度が変更になったので）私はその労災を年金として受け取っていたから、誤解されたのです。

その年の八月、顔を洗っていた時に、左側の顔が顔面神経麻痺になってしまいました。それでも私は化粧して、仕事にいきました。その後、病院に行き、医者からは働くことはできないと言われ、七〇日間、仕事を休むことになりました。

七〇日間かけて、私は病を治しました。主婦会の役員をやっていて、人の前で話すことはできるようになったけれど、夫がいればこんな思いをすることなかったのに、と思うこともありました。

その後、元の仕事に戻りましたが、上の娘が高校（夕張南高校）を卒業して、地元で就職先がなかったので札幌に行くことになりました。下の

娘はまだ高校生でしたので、紅葉山に住んでいた母に預け、私たちは札幌に引っ越すことになりました。昭和五五年九月のことです。

札幌では三年間ぐらいいは、うらうらしていたのですが、札幌の発寒にある（北海道）炭鉱離職者雇用援護協会から声がかかり、そこで六〇歳の定年まで事務補助として働きました。

私は、離職者主婦の会にも入っていました。この会は、当初はそれぞれの山元で三役をやっていないと入って



はだめな組織でした。²⁷二ヶ月に一回ぐらい例会を開き、私は連絡係をしていました。離職者主婦の会の会員は四〇人ぐらいいました。夕張の福井（よしえ）さんが事業団宿舍の集会所を借りて、そこでお弁当を買って、カラオケとかしていました。その例会には二〇人くらい集まっていました。当時の離職者主婦の会の会長は、幌内の五十嵐（光枝）さんでしたが、三笠から出てくるのが大変だったので、福井さんが事務局長をしていました。その後、離職者主婦の会は、鉱婦史会と名前を変えましたが、みんな年齢が高いので、会の維持が大変で、平成二二年頃にやめました。

■主婦会の活動を振り返って

主婦会の活動を振り返ると、とても自分の勉強にはなったと思います。（日本）母親大会への参加によって、さまざまな活動をするようになりました。特に、労働組

²⁷ 炭鉱離職者主婦の会への入会は当初は各炭鉱で会長、副会長、事務局長などの三役の経験者ではないとできなかったが、その後、入会の意思があれば誰でも参加できるようになった。炭鉱離職者主婦会のメンバーの多くは、北炭（北海道炭礦汽船株式会社）系の主婦会メンバーが多かった（炭鉱自体が多かったため）という認識があったようである。出身炭鉱による「差」があったことが示唆する主婦会関係者もいる。

合と国政選挙に関わったことは、自分の成長にもつながったなあと思います。私は四〇年以上、選挙運動に関わり、それは私の財産だと思っています。

選挙の時には、いろいろなネットワーク（主婦会の事務局長などのネットワーク）を使って、声をかけて、親しくしていた人につなげていきました。負ける選挙はだめなんです。今まで私が推した人の中で、落ちた人は一人もいません。

今も、札幌退職者連合手稲支部に関わっています。今回の参議院選挙（二〇一六年）は、北海道選挙区は三人に枠が増えましたが、（民進）党のことを考えれば、区分けすることを考えないといけない。私は娘に伝えて、仲良く一票ずつ（民進党の候補に）入れるように伝えました。孫からは「また、ばあちゃんが、選挙って言っている」と言われますが、そこまで考えて選挙をやっている人はいないのではないかと、って思うのです。

【参考文献】

天野正子、二〇〇五、「動けぬつきあいと「ぐるみ」闘争―炭住の主婦会」『つきあい』の戦後史―サークル・ネットワークの拓く地平』吉川弘文館

古村えり子、二〇〇五a、「闘う主婦」の誕生…日本炭鉱主婦協議会の活動から」『北海道教育大学紀要・教育学編』五五（二）、一八七―二〇一頁

古村えり子、二〇〇五b、「闘う主婦」が地域福祉をつくった―炭鉱主婦協議会の場合―」『北海道教育大学紀要・人文科学・社会科学編』五六（二）、五一―六六頁

河野信子、一九八五、「炭婦協」朝日ジャーナル編『女の戦後史Ⅱ』朝日選書

市原博、一九九七、「人生の岐路に立つ炭鉱の女たち」

市原博『炭鉱の労働社会史』多賀出版

釧路市立図書館、二〇一二、『ヤマの話を聞く会』記録集(2) 釧路市立図書館

三笠市・三笠市幌内炭鉱復旧再建市民会議編、一九七七、

『三笠市と幌内炭鉱―全坑水没から再建までの記録』

三笠市

永岡智郎、一九五七、『日本の主婦』三一新書一二五

西城戸誠、二〇一六、「実践的な調査としての震災調査

に何ができるか」『社会と調査』一六号…三〇―三七頁

西城戸誠、二〇一七、「炭鉱主婦会」木村至聖・玉野和志・

西城戸誠・井上博登・平井健文『JAFCCOF生活・

文化研究班リサーチ・ペーパー vol.1 炭鉱の記憶にも
とづく地域再生』

西城戸誠・大國充彦、二〇一二、「産炭地の比較社会学
I—(4)北海道における炭鉱主婦会と社会運動の源流」
第八五回日本社会学会大会報告。

西城戸誠・大國充彦・久保ともえ・井上博登、二〇一五、
『JAFCOF 釧路研究会 リサーチペーパー vol.3
太平洋炭鉱主婦会の記録——太平洋炭鉱主婦協議会の
会長の聞き取りと資料を中心に【改訂版】』(<http://hdl.handle.net/2065/45732>)

野依智子、二〇一〇、『近代筑豊炭鉱における女性労働
と家族——「家族賃金」観念と「家庭イデオロギー」
の形成過程』明石書店

野村かつ子、一九七〇、「労働者家庭の主婦の活動」一
番ヶ瀬康子・小山隆編『現代婦人問題講座4 家庭と
社会』亜紀書房

佐藤邦子、一九九九、「いつも新しいはじまり」佐藤進
編『証言集ヤマの残響』緑鯨社

産炭地研究会(JAFCOF)・編、二〇一四、『そらち
炭鉱の女性が語る集い——炭鉱主婦会・炭婦協の歴
史に学ぶ——』炭鉱の記憶推進事業団

田巻松雄、二〇一三、『夕張は何を語るか——炭鉱の歴
史と人々の暮らし』吉田書店

嶋崎尚子、二〇一三、「石炭産業の収束過程における離
職者支援」『日本労働研究雑誌』五五(一二)、四一
一四頁。

吉岡宏高(二〇一二)『明るい炭鉱』創元社

付記…本論文は、西城戸が全体の原稿を執筆し、大國が
チェックを行い、西城戸が再度、全体の加筆修正を行っ
た。調査は西城戸・大國に加え、井上博登(調査当時、
札幌国際大学教員。現在、北海道赤平市学芸員)によっ
て行われた。なお、本研究は、科学研究費「東アジア
炭地の再定義…産業収束過程の比較社会学による資源
創造」(研究代表者…中澤秀雄)の研究成果の一部である。